

第8回報告書

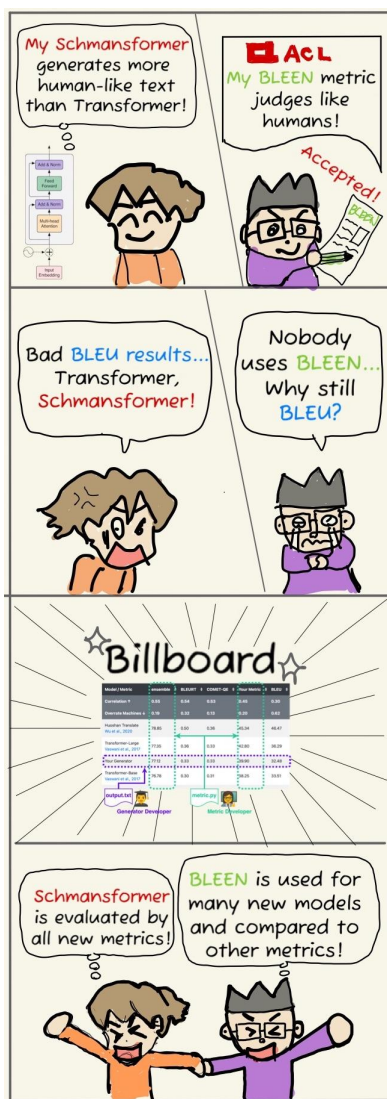
笠井淳吾

ワシントン大学(シアトル)でコンピュータサイエンスのPhDを2018年の9月から始めた笠井淳吾と申します。研究分野としては、自然言語処理(NLP)、機械学習に取り組んでいます。

1. 生活、進捗

PhDも4年目に突入しました。6月に日本からシアトルに戻り、[Allen Institute for AI \(AI2\)](#)でのサマーインターンシップを予定通り始めました。私のアドバイザー(Noah Smith)もAI2に所属しているのですが、インターンシップは別のチームになりました。PhD前と合わせて、これでインターンシップは4度目になりましたが、非常に新鮮で楽しい時間になりました。前回のインターンシップはフルリモートでしたが、コロナワクチン接種後、運よくオフィスで仕事ができるようになりました。研究の性質上、完全リモートでできないことはないのですが、やはり実際にオフィスに行き、集中して研究に取り組み、共著者とすぐにその場で議論したり、また他の研究者と雑談できたりするのは、非常に大きなことだと改めて実感しました。今回のオンサイトインターンシップは、シアトルの大学にいるからこそできたことなので、環境のありがたみを感じました。

研究内容としては、今まで興味を持って取り組んできた、機械翻訳のような言語生成タスクを、いかに効率よく科学的に評価していくか、という問を立てました。従来の評価方法だと、現在あるような大規模なAIモデルを適切に評価するのが難しいことが知られています。しかし、古い評価指標が幅広く使われ続けているのが現状です。この状況が続いてしまうと、リサーチコミュニティとして、間違った理解、方向性に進んでしまう可能性が高いのではないかと考えます。この現状をいかに変えていくのか、試行錯誤しながら、[新しいプラットフォームを提案しました](#)。不遜を恐れずに言えば、言語生成とその科学的評価に対する長年の歯痒さを晴らすような、そんなカタルシスを研究者の方々と分かち合えるような論文を、今回は書こうと思いました。下はプラットフォームの[宣伝を兼ねて私が描いた漫画です](#)笑。こんな感じで楽しく研究できました。



インターンシップメンターの[坂口さん](#)は前回の報告書でも少し触れましたが、まさしく仏様、という言葉が相応しい方で、研究、また研究外での相談や雑談も、非常に勉強になりました。坂口さんは、常にリサーチコミュニティ、また世の中に足りないもの、求められていることを総合的俯瞰的に理解し、それでいて必要な時は細部にも注意を払ったアドバイスをする方です。相談する度に何度も膝を打ちました。そして、本当に立派な研究者は人格者なのだと思います。私は俗物根性を叩き直さなければならないと感じます。少しずつでも、精進していきたいです。

2. 余談

皆さんお待ちかね、前回に続き一つ韓ドラを紹介したいと思います。(誰も待っていないとか言わないように。)話は前回に戻りますが、前回紹介した『サイコだけど大丈夫』の主演女優、ソ・イェジに大きなスキャンダルがありました。詳細は控えますが、以前付き合っていた俳優(キム・ジョンヒョン、愛の不時着にも出ている人です!)に対し、当時不適切に束縛する行動をとったとのことでした。このプライベートの問題もあって、ノミネートされていた百想芸術大賞(韓国版のテレビドラマを含むアカデミー賞のようなもの)にも参加せず、素晴らしい作品の最後にケチがついてしまいました。演者のプライベートの問題は日本でも時々話題になる難しい問題ですが、私自身はある程度作品とプライベートは独立に評価されるべきだという立場なので、作品の評価が下がってしまうとすれば、悲しいです。それに、ソ・イェジになら束縛されてもいいです。(そういう問題ではない。)

この半年も百想芸術大賞を総なめにしたサスペンスドラマ『怪物 (Beyond Evil)』、歴史系コメディ『哲仁王后 (Mr. Queen)』など素晴らしい作品に出会いましたが、やはりこれを外すわけにはいきません。今回は『賢い医師生活 (Hospital Playbook)』です。前回報告書を書いた6月からシーズン2が始まりました。応答せよシリーズなどで有名なシン・ウォンホ監督が手がける、まさに脱非日常、日常の緊張と緩和を丁寧に暖かく描く、昨今の韓国ドラマのトレンドのど真ん中にあるような作品です。大病院で働く五人の医師の生活を中心に、友情、ロマンスを巧みに描き、また患者や死と向き合うとはどういうことなのか、視聴者に問うてくるようなドラマです。専門分野だけでなく、性格も全く違う五人なのですが、それぞれに医師としての信念があり、多忙の中常にベストを尽くして患者と向き合う姿には、尊敬するばかりです。私も兄が医者ですので、身が引き締まる思いで毎週観ていました。

比較的一話完結のようなストーリー構成なのですが、特に2話が印象に残りました。ベストを尽くすも残念ながら流産してしまった患者さんに対し、産科医のソッキョンは、“Bad things at times do happen to good people” という産科の教科書の冒頭にある言葉を患者夫婦に送りました。両親の不仲、妹の死、母の病気、自分自身の離婚で苦しんできたソッキョンだからこそ絞り出した言葉だったのだと思います。世の中は理不尽ですよ。それでも前を向いていかなければならない。素朴ながら、とても重たい言葉だと感じました。この言葉をもってきた製作陣に

は頭があがりません。思わず頭を抱えてしまいました。韓ドラは底が知れません。それではまた半年後の報告書でお会いしましょう！